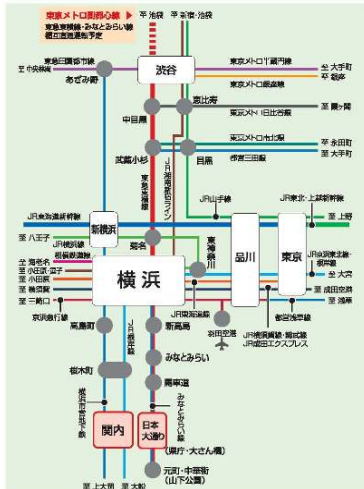


象の鼻パーク交通案内

専用駐車場はありません。公共交通機関をご利用ください。

- 鉄道
みなとみらい線「日本大通駅」から徒歩5分
JR、横浜市営地下鉄「関内駅」から徒歩15分
- バス
横浜市営バス8.58系統「日本大通り」下車、徒歩5分
26系統「税関前」下車、徒歩2分
あいくつ「大規模入口」下車、徒歩2分
- 主要道路
羽田空港から高速横浜線経由で約22km
粟田名横浜・町田ICから高速府道線経由で約26km
- 近隣駐車場
赤レンガパーク駐車場 約80台
大さん横浜国際客船ターミナル駐車場 約400台
日本大通り駐車場 約200台



発行：横浜市港湾局海灣整備部企画調整課再整備調整担当
〒231-0023 横浜市中区山下町2番地
産業貿易センタービル5階
TEL：045-671-2861 FAX：045-671-7310
URL <http://www.city.yokohama.jp/me/port/general/zouhonaha/>

●資料提供
横浜開港資料館・小泉氏写真（撮影：黒木武浩）

発行所 株式会社 横浜新聞社
〒231-0023 横浜市中区山下町2番地
産業貿易センタービル5階
TEL：045-671-2861 FAX：045-671-7310

横浜市広報印刷物登録第200476号 種別：分類0-1A120

「時の港」横浜の歴史と未来をつなぐ象徴的な空間

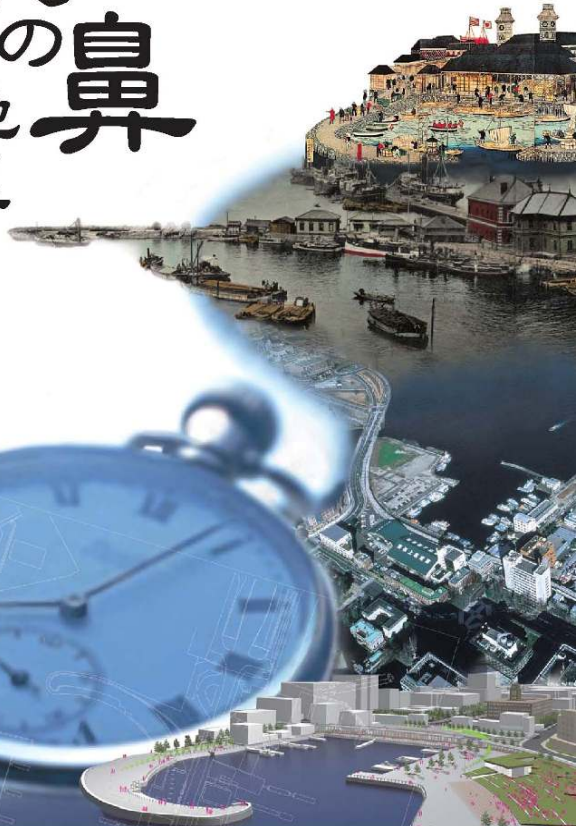
横浜港発祥の地

象の鼻地区

横浜開港150周年

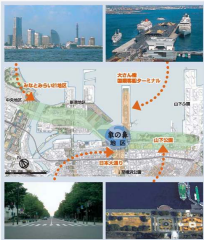
開港150周年記念事業

象の鼻パーク
6月2日
オープン
12時00分から



横浜市港湾局

象の鼻地区とは



▲象の鼻地区周辺地図

安政6年(1859)の横浜港の開港にあたり東波止場(イギリス波止場)と西波止場(税関波止場)の二本の直線状の波止場がつけられました。その後、慶応3年(1867)に東波止場は湾曲した形に変更され、その形状からいっしが象の鼻と呼ばれるようになりました。

象の鼻地区は、この東西の波止場に囲まれた水域に面している一帯(約4.0ha)を指し、横浜港発祥の地としての歴史性や、みなとみらい21地区から山下公園を結ぶ水階級と、日本大通りから大さん橋を結ぶ都市軸との接点としての立地特性を有しています。また、今なお船溜まりとしての港湾機能を有し、趣のある歴史的建築物に囲まれています。



▲象の鼻手前の象の鼻地区周辺写真

象の鼻地区の歴史



▲開港15年 象の鼻地区(開港前) 2万5千分の1(横浜開港資料館)



▲開港39年 象の鼻地区(開港後) 2万5千分の1(横浜開港資料館)



▲開港48年 象の鼻地区(開港後) 2万5千分の1(横浜開港資料館)



▲開港57年 象の鼻地区(開港後) 2万5千分の1(横浜開港資料館)

◆ 横浜港の歴史と象の鼻地区

江戸時代末期、長く外国との関係を絶ってきた日本に開国を求めて米国のペリー提督の一行が来航し、幕府は東海道路から離れた横浜村を交渉場所として選び、嘉永7年(1854)に日米和親条約が現在の横浜開港資料館の建つ場所において結ばれました。その後、安政5年(1858)には、米、蘭、露、英、仏の5カ国との間に修好通商条約が結ばれ、翌安政6年(1859)6月2日に横浜は開港しました。

開港場として発展した横浜の歴史は、日本の近代化の歴史の重要な一幕であり、西洋文化と文明の多くは横浜を窓口として日本に導入されました。外国人居留地が設置されると多くの外国人が訪れ、わが国のもののはじめを彩る西洋の新技術が人々を驚かせました。一方、近代国家建設を見て西洋の知識を学ぶため、多くの日本人が横浜港から旅立つなど、開港以来、幾多の人物が交流してきました。

開港から150年、横浜港は、我が国の成長とともに発展を遂げてきました。その間には、関東大震災や戦災など幾多の困難もありましたが、取扱貨物の増大や船舶の大艦化・

コンテナ化に対応したふ頭の新設や効率的な港湾運営を実施し我が国を代表する国際貿易港となりました。一方、明治、大正期に建設された「みなとみらい21地区」をはじめ都心のウォーターフロントとして再開発を進め、現在では横浜の代表的な観光エリアとなっています。

その中であって、象の鼻地区は、今も変わらずに往時の空気を伝える貴重な空間として、150年前と変わらない場所にその姿を残しています。

歴史あるこの場所に身をおくと、居ながらにして、150年にわたり横浜を支えてきた港と、先人たちの愛護の息吹を感じることができます。

象の鼻の名前の由来

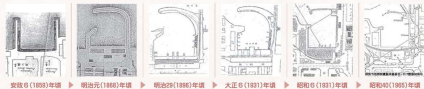
「象の鼻」の名前は「横浜開港誌」(内務省国史館編纂局編、明治39年(1896))に初めて見られます

→明治編: 横濱開港の記述の中に、以下のように記述されています。
「其西部(西)の岸より南二角二突出し入ルコト百廿五尺、西方二曲折シテ一ノ象鼻形ヲ爲ス。」



▲明治43年(1910) 象の鼻地区と周辺の風景

◆ 象の鼻地区の変遷



▲安政6(1859)年頃 ▶ 明治元(1868)年頃 ▶ 明治28(1895)年頃 ▶ 大正6(1917)年頃 ▶ 昭和4(1929)年頃 ▶ 昭和10(1935)年頃

日本の変遷

- 海に向かつて玄関が、先頭に背役付を設置した東波止場(イギリス波止場)、左側が西波止場(税関波止場)で、その基盤には灌漑所(税関の前身)が設立されました。
- 沖合に停泊する本船とこの波止場の間を、膠(はしけ)等を使って人や荷物を運んでいました。

近代横浜港の整備

- イギリス人パーマーの計画により、近代横浜港の整備が進められました。
- 象の鼻が波岸の湾曲に鉄橋(現在の大きな橋の前身)が建設され、また、西波止場には新港の頭が築造されました。
- 波止場から橋、沿頭へとの道は交代し、象の鼻地区の水域は物揚場、船だまりとして役割を終りました。

開港復興から整備前まで

- 開港大震災を経て、象の鼻防波堤は旧来の位置を離脱しながら、やや斜めに湾曲を呈した。この地区は物揚場や船だまりとして活用されました。
- 水域を囲む湾曲の形状は基本的に当初の姿を今に伝えており、貴重な港湾の歴史遺産です。

象の鼻パーク整備

横浜港発祥の地「象の鼻地区」は開港150周年記念事業の「横浜の新たな顔づくり・まちづくり推進プロジェクト」の中で、象徴的な事業として位置付けました。横浜ならではの歴史的資産を活かした空間を演出し、新たな港の顔、市民の憩いの場、交流の場として整備を行うことを目的としています。

◆ パーク整備の基本的な考え方



※文化・芸術活動の発信(ナショナルアートパーク構想)

【ナショナルアートパーク構想について】

都心臨海部を今以上に市民に親しまれる場とするとともに、開港都市としての歴史や文化等の資源を生かしながら、文化芸術活動の積極的な誘導により創造的産業の育成や観光資源を発掘することでまちの魅力を高め、都市の活性化、横浜経済の発展を図る構想です。

象の鼻地区の位置付け

「象の鼻地区」を中心に、大さん橋や赤レンガ倉庫によって形成されるエリア一帯を、横浜を代表する国際的な文化観光交流エリアの一つとして捉え、積極的に創造的な機能集積を図ることによって、「文化芸術創造都市・横浜」の都市イメージを牽引します。



◆ 歴史的港の遺構の活用

港の歴史が感じられるよう、象の鼻防波堤を明治期の形状に復元整備するとともに、工事中に発見された明治期の港の遺構の保存活用や、解説板などにより象の鼻地区の歴史や港の遺構などを紹介しています。

② 倉庫の基礎

▲発見時

▲整備後

③ 石積の防波堤

▲発見時

▲整備後

① 鉄軌道及び転車台

▲発見時

▲工事中

発見された港の遺構

- ① 港の貨物線の鉄軌道及び転車台
明治20年代末に整備された、岸壁から横浜税関の輸入上屋への荷役を担った鉄軌道及び転車台
- ② 旧横浜税関倉庫の基礎
明治20年代末に整備された横浜税関の煉瓦造2階建て倉庫の建物基礎
- ③ 石積の防波堤
開港初期の石積み護岸のうち関東大震災により沈下した石積み護岸の一部

◆ プロポーザル方式による設計者選定

同じ設計者が一貫して設計することで質の高い空間づくりができると考え、プロポーザル方式による設計者選定を行いました。なお、選定にあたっては、開港150周年記念事業で「チャンスあふれるまち」元気な横浜を創造する人材育成に向けた取り組みとして、対象を開港100周年(1959)以降に生まれた若手建築家としました。二次にわたる選考の結果、横浜市在住の小泉雅生氏が選定されました。



■ 評価委員会講評(抜粋)

小泉さんの提案は象の鼻防波堤と開港を記念する広場を含む「大きな風景」全体を囲む大きな光のサークルです。FRPグレーチングでできたスクリーンが並べられて、大きなサークルをつくっています。象の鼻防波堤と開港を記念する広場全体の風景から、このサークルの形状を発掘しそれを視覚的に表現することに成功しています。高いシンボル性を獲得する可能性を持っていると判断されました。



小泉 雅生 氏

略歴

1963 山口県生まれ
2001 首都大学 東京都市環境科学研究科 建築学専攻 准教授
2005 小泉アトリ工設立 (横浜市中区)

「象の鼻地区」の計画にあたって、「みなと横浜の原点」を可視化する大きな風景を作り出したいと考えました。周辺地区からは、開港の地を包み込むようなサークル形状が見えてきます。開港波止場においては、横浜三塔、赤レンガ倉庫、大さん橋といった横浜を代表する風景がスクリーンの上に展開します。赤レンガパークから山下公園へと至る水際のプロムナードと横浜公園から伸びる日本大通りなどが交わる場所で、さまざまな人や文化の交流を生み出す空間となればと思っています。

象の鼻パーク整備図

象の鼻防波堤や護岸を改修するとともに、日本大通りから港への通景空間を確保した開放的な広場（開港波止場）のほか、水辺や夜景を楽しむ場として、港や海を見渡す緑のオープンスペース（開港の丘）、水辺のプロムナードを整備しました。

Aゾーン

- **開港の丘**
港や海を見わたす緑のオープンスペースや水辺のプロムナードを整備し、水辺や夜景を楽しむ場としています。
- **象の鼻テラス**（多目的レストハウス）
ナショナルアートパーク構想の拠点地区として創造的な機能の集積を図るため、カフェを併設した休憩施設である「象の鼻テラス」を、アート作品の展示や音楽・演劇等のパフォーマンスの開催ができる文化観光交流の拠点として活用します。



▲開港の丘



▲象の鼻テラス

Bゾーン

- **開港波止場**
日本大通りから港への通景空間を確保するとともに、イベント等が可能な開放的な空間としています。
- **鉄軌道及び駅舎台**
明治20年代末に整備された、岸壁から横浜鉄道の輸入上屋への荷役を担った鉄軌道及び駅舎台を展示しています。
- **山下臨海線プロムナード**
山下公園四郎から新港橋の間に残っていた鉄道高架橋を利用し、平成14年に遊歩道としてオープンしたものです。



スクリーンパネル

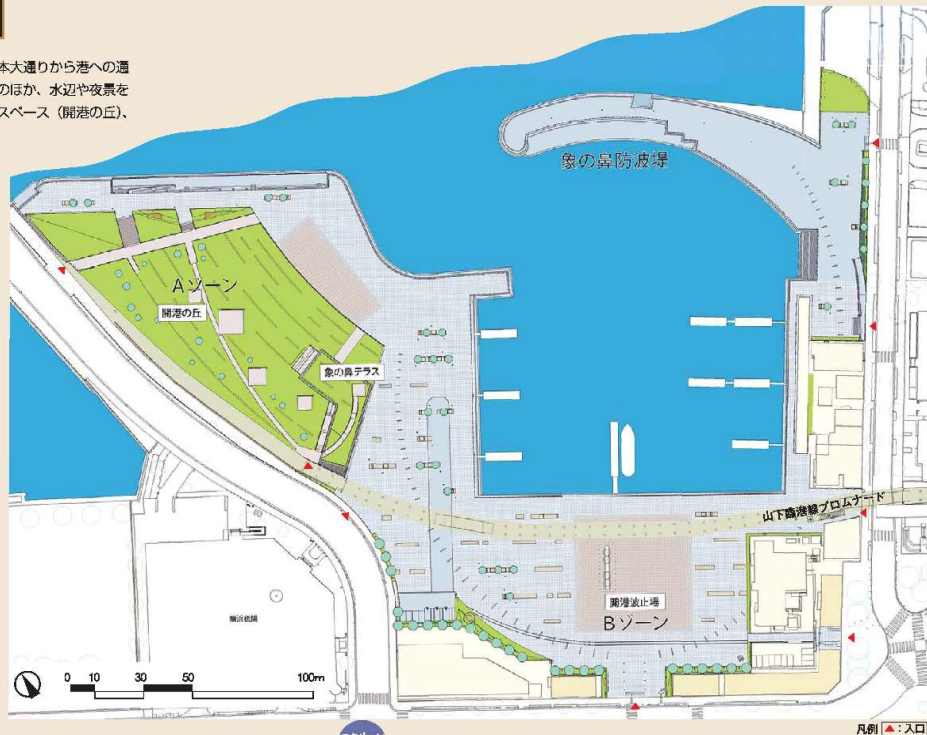
- **コンセプト**
復元後の防波堤の曲線を活かしながら、スクリーンパネルを一定の間隔で配置することにより、地区全体にわたる大きなカブールを描き、シンボリック空間を形成します。
- **デザイン仕様**
海側に時代を象徴する新しい材料としてFRPグレーティングを、陸側に近代日本の産業発展を支えた港のシンボルとして鋼鉄の欄干を重なる合わせは構造となっています。
- **照明演出**
照明日は時間帯で、照明を電球色・薄青色、青色と3段階に色を変えます。
開港記念日など特定日には、特別仕様の照明演出を計画しています。



▲デザイン仕様



▲照明演出



凡例 ▲:入口

象の鼻防波堤

- **防波堤**
明治20年代後半の姿に復元しました。復元にあたっては、震災大量炭で沈んだ石積み形状も再現できるようにしました。



▲工事中

水域

- **保衛船舶**
小型観光船や業務船舶が係留します。
- **水上交通**
観光旅客船及び市内遊覧船等の発着場所を設け、湾内の水上交通拠点とします。
- **水質改善**
水質、及び生物の生息環境を改善するため、海底に溜まった泥を取り除き、良質な砂に入れ替えました。



▲工事中